

---

# アルバム(短編集)

十六夜 あやめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルバム（短編集）

### 【Nコード】

N82290

### 【作者名】

十六夜 あやめ

### 【あらすじ】

これは、僕の成長をまとめたアルバム。

町外れの一角にある古びた本屋で生まれた僕と、毎日通う彼女が読み上げる本の物語り。

「さあ、物語をはじめよう」

## 1 ページ目 オープニング(前書き)

きつとこれから、短いお話でいっぱいになると思います。気軽に読んでください。

## 1 ページ目 オープニング

これは、僕の成長をまとめたアルバム

小さな町のさらに人通りを外れた一角。そこにある古びた本屋で僕は生まれた。けして裕福ではなかったけれど、それでも、幸せだった。

僕が小さいとき、言葉もまだまともに覚えていない頃、お店にはいつも女の子がいた。ママとは違う雰囲気を持ったお姉ちゃん。毎日お店に来て、適当に本を取って読み聞かせてくれた。

- 『太陽の翼を持つ少女』
- 『黄金のパンドラの箱』
- 『3人のピエロのおはなし』
- 『ある初恋のおはなし』
- 『またお会いしましょう』
- 『星屑の声』
- 『取り戻す物語り』
- 『銀の月の掬い方』
- 『色彩の国の五人の妖精』

彼女はほかにもいくつも読んでくれた。

僕の人生にはいつも彼女が傍にいて、言葉が宙にふわふわと浮か  
んでいた。彼女の言葉は魔法だ。きっと誰にもできない彼女だけの  
魔法。そう、彼女をたとえるならば、あたたかくてやさしい光りそ  
のものだ。

それなのに……………

覚えてたての言葉が彼女を傷つけてしまうなんて……………

これは、僕の悲しみが悲しみに終わらないように紡ぐ物語。

## 2ページ目 『太陽の翼を持つ少女』

月曜日。

外は雲ひとつ無い快晴で、小鳥たちのさえずりが響いていた春の初め。

その日もこのお店にはあのお客さんのみだけだった。

「こんにちわ。今日もお邪魔しますね」

その女の人はすつきりと細くて、白い顔。通った鼻筋に、うすいくちびる。若草色のトレンチコートとゴーグルを身に着けている。

僕の記憶では彼女は、物心がついた頃からこのお店に来ていた。気が付けば床に座って、傍らにある本を適当に手にとって読んでいる。

僕は毎日来る彼女に興味があつて、いつも隣に座っていた。

その日から彼女は本を読んでくれるようになった。

「今日もいい天気だね。キミはまだお外には遊びにいけないんだね。よし、今日も何か読んであげるね」

そついうといつものように適当に本を手を取った。

「今日はこの本にしようかな。『太陽の翼を持つ少女』のお話だよ。私もはじめて見たな、こんな本。結構古い、100年以上も前だ」

「  
彼女はページをめくり、唄を歌うように優しく柔らかな声で言葉を読み上げていく。」

「 『太陽の翼を持つ少女』

太陽に近づくとつれ、次第に翼は溶けていきました。  
それでも少女は羽ばたくことをやめませんでした。

太陽に近づくとつれ、次第に翼は小さくなっていきました。  
それでも少女は羽ばたくことをやめませんでした。

太陽に近づくとつれ、次第に翼は形を失っていきました。  
それでも少女は羽ばたくことをやめませんでした。

さて、なぜだかわかる？」

本を読んでは、「なぜだかわかる？」や「どう思った？」などの質問を投げかける。その問いに僕は毎回悩まされていた。

内容について考えているわけじゃない。知っている言葉を引き出して紡いで言うでもない。ただ、彼女が嬉しがるような、笑って出れるような言葉を探していた。

その時がたまらなく嬉しかった。

「たいようがあったかそうだったから！」

彼女はくすくす笑った。

「うーん、それも間違いじゃないね。でもね、それよりももっとピツタリな答えがあるの。」

なぜなら、その翼にははじめから炎が灯っていたのです」

「……………?」

「まだ難しいおはなしだったね。私にも難しいお話だよ」

「そのおんなの子はさいしょっから燃えてたの？」

「燃えているわけじゃないんだよ。その少女の翼はね、溶けてしまっても、小さくなるうとも、形が無くなって失っても、太陽まで行くと決めた想いが灯っていたの」

「……………ぼくわからない」

彼女は僕の頭に手を置いて撫で、

「もっともっと本を読んで、言葉を知って、知識を増やしていくのよ。そして、この世のありとあらゆる本を記憶するの。そうしたら



きつとこの世界が違って見えるよ」

「ぼく、がんばる！ おねえちゃんみたいにたくさん本をよむ！」

彼女はにこつと微笑んで本を僕に渡し、もう一度頭を撫でて「また来ます」と、お店を出て行った。

お店の天窓の真上に、太陽がちょうど昇ってきた。  
翼を持った少女はこの太陽に向かって飛んでいった。  
真っ赤に燃える太陽へ

ぼくにはまだむずかしい。  
意味なんて理解できない。  
けれど、いい思い出になった。

その光りを求めて。

2ページ目 『太陽の翼を持つ少女』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。感想やコメントをいただけるとうれしいです。

### 3 ページ目 『黄金のパンドラの箱』

火曜日。

朝から相変わらずのぼかぼかとしたいい天気だった。

ママと一緒に買い物に行き、帰る途中に散歩道を通った。

そこには覗き込めば自分が映るほど澄んだ小川がある。

小川の近くにある桜の木には小さな蕾がいくつもあり、開花の準備をしていた。

小鳥が集まって合唱会を開いている。

僕もママに手を引かれながら鼻歌を交えてコーラスをした。

まだ太陽が東側にある頃、家に帰宅すると開店前のお店にあの人が床に座って本を読んでいた。

若草色のトレンチコートにゴーグルをした女性。

じつは彼女の名前を知らない。たしか一度言ったような気がするが、覚えていない。

なんとなくだが、春に咲く花の名前だったような気がする。

名前が思い出せないからいつも「おねえちゃん」と呼んでいた。

「おねえちゃんおはようございます！ きょうははやいね」

彼女は読んでいた本にしおりを挟んで閉じ、僕の方を向いた。

「おはよう。キミは今日も元気だね。まるで太陽のような子だ。今

日は午後から用事があるから無理を言っただけだ」

「ほんとうに本がすきなんだね」

「うん。私は本が一番好きだよ。町で見るパレードより、小川の近くの桜を見るより好きだよ。本には自分にしか想像できない風景が広がっている。どんな景色よりも綺麗だよ」

「そうかなー？　ぼくはさくらの花好きだよ」

「キミも分かるときがきつとくるよ」

彼女は本を鞆にしまい、また適当に本を手を取った。

それは分厚い表紙で箱のようだよ。

背表紙には金色でタイトルが書かれている。

けれど、ぼくにはそのタイトルは読めなかった。

「……『黄金のパンドラの箱』」

彼女はそう言う目を見せた。

「キミにはまだ難しい話だな。それでも読んでほしいかい？」

「うん！」

彼女はやれやれと本をめくった。

1ページ目には黄金の箱のイラストが描かれている。

2ページ目には幸福と災厄のふたつの言葉が書かれていた。

「それじゃあ読むよ。」

少年はある日、黄金に輝く箱を見つけました。

その黄金の箱はけて開けてはいけないと書かれていました。

少年は一度家に持ち帰りました。

開けてはいけないと書かれていたので開けずに置いておきました。

しかし、数日経った頃。とうとう少年は開けようと決心しました。

その箱には鍵は掛かっておらず、簡単に開けることができました。

少年が蓋を開けると、中からはこの世のありとあらゆる？幸福？が飛び出してきました。

慌てて蓋を閉じてももう手遅れ。

箱に残されたのはこの世のありとあらゆる災厄と少年から奪い取ったただ一つの幸福だけ。

幸福の名前は？過去（思い出）？

さて、少年はいつまでその箱を閉じたままでもいられるでしょうか「

読み終わると彼女の目には薄っすらと涙が浮かんでいた。

「どうしたのおねえちゃん！」

「いや、この話を読んでいると悲しくなるんだよ……。きっと私がこの少年だったらすぐに箱を開けてしまっただろうね。キミはどうかな？」

「……ぼくわからない。どうしてこれが悲しいお話なの？」

理解できていない僕に彼女は簡単に話を説明してくれた。

「この箱を開けたことで世界は幸福になったんだよ。今までにないくらいにね。」

たとえるなら楽園かな。小川の水はまるで果物の果汁のようで、一年中桜は咲き、小鳥たちは終わることのない音楽会を開く。汚いものや嫌なことが何一つ無い世界になったの。

でもね、箱の中にはまだひとつ？幸福？が残ったの。その幸福を取り出そうとすれば、幸福で満ちている楽園は災厄で滅んでしまうの。」

「それって、らくえんがきえちゃうってこと？」

「そうだよ。悲しいでしょ？それにね、残った幸福が？過去？（思い出）なの。この箱を開けた少年は楽しい思い出を奪われてしまった。」

選択肢は2つ。

ひとつは自分の幸福をあきらめて世界のみんなの幸福を見守ること。

ひとつは自分の幸福を取り戻して世界のみんなを災厄に巻き込むこと。

キミはどっちを選ぶ?」

悩んだ。

このときばかりは彼女の喜ぶ答えをよく考えた。

でもなにも思い浮かばない。

こんなときなんて言えばいいか僕には分からない。

ひとつだけ言えるのは選択肢は2つなんかじゃないってことだ。

「ぼくはどっちもえらばない。ぼくはみんなが幸せで、ぼくも幸せな答えをさがすよ!」

彼女はくすくす笑った。

本を閉じて僕の頭を、何度も何度も、くしゃくしゃになるまでなでた。

「キミのような答えを選ぶのも悪くないかもね。けれど、答えを見つくるまできつと辛いと思うよ?」

「ぼくはそれでもさがすよ!」

彼女は涙を拭いて立ち上がった。

「キミのような人を世界は必要としているのかもしれないね。今日

は逆に勉強になったよ。それじゃあまた来るね」

彼女は僕に本を渡して出て行った。

本の最後を開くと、黄金の箱に幸福と災厄が同じだけ入っているイラストが描かれている。

このときの僕には分からなかったが、世界とは幸福と災厄が同じだけあるものだ。

だから箱を開けても大丈夫なのだ。

はじめから答えはひとつだった。

箱を開けて少年もみんなも幸せになればいいんだ。

ひと時の夢を見ていたと考えればいい。

みんなが平等の世界、それが一番の幸福なのだ。

そう思った。



3 ページ目 『黄金のパンドラの箱』 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。感想やコメントをいただけたら幸いです。

#### 4 ページ目 『3人のピエロのおはなし』

水曜日。

その日は曇りだった。午後から晴れると天気予報では言っていた。薄い雲が世界を覆っている。

霧が掛かったような奥の見えない感じはこの土地特有の現象だ。

この町の間では？霧界？むかいと呼ばれている。

曇りの日はほとんど霧界に覆われる。

そんな薄暗い雰囲気きんぎの町を照らす月光のような人が今日も僕の家（町外れの一角にある古本屋）に来た。

「開店してますよね、お邪魔します」

彼女はどんな天気あまのときでも明るい人だ。

嵐あらしのときでも雨の日でも、冬の寒い日でも、このお店を照らしてくれるのだ。

「いらっしやい！ おねえちゃん！」

「キミも元気だね。今日はどんなお話はなしがいいかな？」

彼女は「よっ」と積み重ねられている本の中から一冊を取り出した。

その本もまた年期の入ったぼろぼろの本だった。

「あ、懐かしい！ 『3人のピエロのおはなし』だ。今日は面白いお話だよ」

彼女は楽しそうに表紙をめくった。

そこには3人のピエロのイラストが載っていた。

赤いピエロ

青いピエロ

黄色いピエロ

彼女の顔を覗き込むと目がきらきらと輝いていた。

それほどこの本は彼女にとって、思い出に残ったものなのだろう。

僕自身もその本に興味が湧いた。

多くの本を読んできた彼女が「面白い」という本は一体どんなものなのか

「それじゃあ読むね。」

『3人のピエロのおはなし』。

とある国の王子様が退屈しのぎに、国で有名なサーカス団のピエロを3人、お城に招きました。

そして王子様は、

「私になにか芸をして見せよ」と。

突然呼ばれたピエロたちは当然驚きました。

けれど、王子様の命令は絶対。

そしてピエロたちは自分たちの今できる力を最大限引き出せる芸をすることになりました。

そして、

赤いピエロは言いました。

王子様、どうかこのぼくの芸を見て笑ってください。

青いピエロは言いました。

王子様、どうかこのぼくの芸を見て涙を流してください。

黄色いピエロは言いました。

王子様、どうかこのぼくの芸を見て手を叩いてください。

そして王子様は言いました。

さて、なんて言ったと思う？」

あれ？ あまり面白さがわからない。

僕は理解できずにいた。

一体なにが面白いのだろうか。

王子様が最後に言う言葉が面白いのかな？

だからこんな質問をしているのかな？

「きみたちはおもしろくない！」

彼女はお腹を抱えて笑った。

「本当にキミは面白いね。王子様がそんなこと言ったら、ピエロさんが可愛そうだよ。もっと面白い答えだよ」

もっと面白い答え？

なおかつピエロを傷つけない答え。

……。

「おもしろかったです？」

彼女はまたもお腹を抱えて笑った。

僕の答えは全然違うのだと思った。

「面白いっか。王子様はこう言ったんだよ。

『ピエロ様どうか僕に芸を教えてください』ってね。

どう？ このおはなし面白くないかい？」

「ぼくわからない」

「あれ……。簡単に説明するね。

この3人のピエロはともすごい芸をもっているんだよ。それを王子様に見せたでしょ？

ピエロたちは自信がある芸をした。

だから、

『王子様、どうかこのぼくの芸を見て笑ってください』

『王子様、どうかこのぼくの芸を見て涙を流してください』

『王子様、どうかこのぼくの芸を見て手を叩いてください』

と要求をしたの。

すると、芸を見た王子様は感動して『わたしにも芸を教えてください』って言ったの。王子様は予想もしていなかった。生まれて初めての気持ちをそのとき知ったの。それほど王子様にとって印象が強かったのね」

「おねえちゃんもこの本がすきなのは、いんしょうがつよかったから？」

「そっだよ。このおはなしはとっても面白いわ。王子様の顔の表情が目に見えちゃうの。威張ったような顔が徐々に壊れていく。笑って、涙を流して、手を叩いて、お願いするときのあの顔。

文章だけでまるで、目の前で芸を見ているように感じるのはこの本が初めてだった」

「たしかに、おもいうかべたらおもしろいね！」

「よかった。キミにもこの本の面白さが伝わって。あ、今日は買い物があるんだった。じゃ、また来るね」

彼女は本を閉じて僕に渡し、お店を出て行った。

この薄暗い空を切り裂くように太陽の光りが差し込んできた。  
やはり彼女はこの町を照らす存在なのだと思った。

その日の晩、僕はママにある告白をした。

「ねえママ！　ぼくすきなひとができたんだ！」

「あら、おめでとう。よかったわね」

ママは喜んでくれた。

明日また彼女が来るのが楽しみでその日はなかなか寝付けなかった。

5 ページ目 『ある初恋のおはなし』(1)

木曜日。

この古びた本屋は気まぐれなお店だ。

本当なら開店して営業している時間だが、その日はシャッターも上げずに朝から大掃除をしている。

窓を全て開放し、春の心地よい暖かな風が入ってきた。

舞い上がるほこりと本がめくれる音が心地よいリズムを刻む。

晴れ渡る青空には一本の飛行機雲が浮かんでいる。

窓越しの空は、それだけで一枚の写真や絵になっていた。

そんな中、僕はあの人があるのをうずうずして待っている。

彼女に逢いたくて、本を読んでもらいたくて待ちきれずにいた。

ママに雑巾を持ってきてと言われたばかりなのに、頭の中は彼女のことばかりで忘れてしまっていた。

「すみませーん！ 今日はお休みですかあー？」

シャッターの向こうで彼女の声が聞こえた。

僕は駆け足で、裏口から外に出ようとしたがママに止められた。

「こら。1人でお外に出ちゃいけないって言ったでしょ。いまあけるから、バケツと雑巾持ってきて」



「うん、わかった!」

ママがシャッターを空けている間に僕は洗面所に向かった。床に置いてあるバケツと、適当にほつれていたタオルを手にして入り口に走る。

本棚に足の小指をぶつけたが痛みを感じなかった。彼女に会いたい一心が痛みを感じさせなかったのだ。

ちょうどシャッターが上がり、彼女は珍しくフリルの付いた洋服を着ていた。

「あの、お母さま? この子を一緒に町で行われる演劇に連れて行っていいですか?」

「あら、演劇に連れて行ってくださるの? 私も行きたいけれどお掃除があるので仕方がありませんね。どうぞ、この子も暇をしているのでよろしくお願いします」

「いつてきていいの?」

「いいわよ。でも、1人になっちゃダメよ? しっかりお姉さんといるのよ」

「うん! それじゃあいつてきます!」

僕は彼女と手を繋いで町の中心へと向かった。

演劇会場がある所に着くと、たくさんの人が列になっている。皆

ここで行われる演劇を見に来たのだろう。片手にチケットが握られていた。

僕にとって多くの人を見るのは初めてだった。買い物の時や公園ではあまり人を見ない。だからこのとき、心臓の鼓動は高鳴っていた。

「私たちは列には並ばないよ。さあ、こっち」

彼女は会場の裏口に回り、鍵を開けて中に入る。そこは暗くて、下に置いてある物に気付かず何度か蹴ってしまった。彼女は僕を抱っこして何にもぶつからずに歩く。少し歩いていくと光りが漏れている扉が現れた。彼女はその扉を開く。

扉の向こうはカーペットが敷かれた狭い部屋だった。人が入って6人くらいだ。その中の片壁は鏡が一面に張られている。反対側には帽子や紙が張ってある。ここは舞台の裏側、役者たちの待合室だった。

「今日はね、私の初めて書いた小説を演劇にして公演するの」

「おねえちゃんはさっかさんなの!？」

「名前もまだ売れていないアマチュアだよ。だから本を読んで勉強しているの。それでも、あれだけのお客さんが来てくれるなんて感激だよ。そっだ、君にも特別に台本をあげるね」

彼女から手渡された台本には『ある初恋のおはなし』と書かれている。僕は簡単な漢字を読めるようになっていた。

「さあ！ 今日の演劇に参加してくれる主人公とヒロインの紹介をするね」

彼女は、奥に座って鏡の前で化粧をしている男の人から紹介を始めた。

「彼はクラウディア。主人公の少年を務めてくれるわ。そしてこちらの女性はフィオナ。王女様役をやってくれるわ」

「はじめまして、クラウディアです。君が彼女が毎日通ってるお店の子だね。今日は彼女の作品を精一杯演じさせてもらっよ」

「はじめまして、フィオナです。わたし彼女の作品に心惹かれたのだから今回この演劇に参加させてもらったの。よろしくね」

彼らに握手と簡単に自己紹介をして挨拶した。

「この2人は同じ学校の友達なの。ちなみに私はナレーションをするの。楽しみにしててね」

彼女は台本を広げて何度かリハーサルをした。その間に2人は化粧や小道具、洋服の準備をしている。

公演まであと5分になった。

彼女たちの緊張と観客の張り詰めた空気が舞台の裏側に漂う。

彼女に連れられて僕は、様々な機械が置かれている2階の部屋に上がる。そこから窓越しに客席を見た。空いている席がひとつも無

い、満席だ。

「宣伝した甲斐があったね」

彼女はこの日のために町中にポスターや宣伝をしていたようだ。まだ名が売れていない作家の作品を、これだけの人が楽しみにしているのは僕にとっても嬉しいことだった。

そして、ブザーの音と共に幕はゆっくりと開く。

『これはとある一つの恋愛劇』

彼女のナレーションから劇は始まった。

『中心にいるのは1人の少年と少女。そう、例えるのならば夜空に輝く星々の儂い光……』

舞台上に照明が当たり、少年役のクラウディアが出てきた。

『少年は旅をしていました。そしてある国に着きました。国の名前は聖王国。建物は真っ白く、汚れなんて見当たらない。埃も舞っていない清潔な国。少年はその国のを探索していました』

「なんて国だ。ここが聖王国か……。何もかもがきれい過ぎて……とても人が住む処には見えない……」

彼の声は静かに、しかし遠くまで聞こえる声が響く。

「ちょっとー！ その少年！ どいてえー！」

舞台の裏側から走りながら出てきた王女役のフィオナが彼とぶつかった。

「……………」

「どいてと言っただろうが！ 怪我をしたらどうする！」

「あなたこそ！ それに、急で回避なんて不可能だ！」

ナレーションをこなしながら彼女は機械のボタンを押す。

「王女様ー！ いたぞ、あそこだ！ 近くに不審者がいる！ 逃げ！」

テープにはじめから録音しておいた音声を流したのだ。

「仕方がない！ 少年、私と一緒に逃げるのだ！」

「え、なにを！」

王女様に手を引かれ、少年は幕の裏に消え、照明が落とされた。

6ページ目 『ある初恋のおはなし』(2)(前書き)

この5・6ページ目は少し分かりにくいかもしれませんが…。  
それでも読んでいただきたいと思います。

## 6 ページ目 『ある初恋のおはなし』(2)

『少年は1人の女性に出会いました。わずか16歳にして王女様になつた少女。

その人は強く気高く、美しい人で、例えるなら太陽のような明るい人。でも、それ故にとてつもなく大きく、重い十字架を背負っていました。

だから少年は、この人に関わるとろくでもない運命が待っているであろうことは、なんとなく最初っから分かっていた……』

走りついた先は大きな扉の前。

王女様は鍵を取り出して開け、2人は入っていく。

「ここは代々、王女のみが入ることを許されている場所だ。つまり、君は歴史に名を刻まれることになるだろう。光荣だな」

「なにが光荣ですか！ 王女様、僕はあなたとの逃走や遊びに時間を掛けている余裕は無いのです！ 私は次の国へ旅に出なければいけないのです！」

王女様は彼の言葉に強く反応した。

「君は旅人なのか！ 私はこの国に生まれ、一度も国から出れずして王女となった。外の世界を私は知らない。君さえよければ、旅の話聞かせてはくれないか？」

『少年は王女様の悲しそうな表情を見て、ほって置くことができませんでした』

舞台の真ん中で2人は座り、少年は旅の話しを語りだす。

旅に出たきつかけ。始めての外の世界。知らない言葉や文化。

王女様も国を治める大変さや、あと1年で結婚をしないとイケないなど、心の叫びを声にして少年に話した。

互いに意気投合し、仲良くずっと話し続ける。

そして気付いた頃には数時間が経っていた。

「君に会えてよかった。私の知らない物語を知れて面白かったよ。今日はもう戻らなければ、私は2度と出られないように監視されるだろう」

「……王女様。僕もあなたに会えてよかった。出会いは最悪だったけれど……。僕にとってあなたは大切な人です。だって、そうあなたは僕の友達ですよね？」



「君はあっさりと恥ずかしいことを言うな！　だけど、元気が出た。本当に君と話せてよかった。……私にとっても、君は大切な友達だ」

『王女様は頬を赤く染め、俯きながら走って行きました』

静かに、ゆっくりと照明が消される。

『さあ、ここから物語りは思わぬ方向へ向かう』

王女のみが照明を浴びる。

『王女様が部屋へ戻り、服を着替えていると一通の真っ白な封筒が床に落ちました。』

？王女様へ。明日、朝日が姿を現す前にあの場所で待っています  
？と  
』

照明が切り替わり、少年だけを照らす。

『少年のもとにも一通の真っ白な封筒が服に忍び込まれていました。  
？少年へ。明日、朝日が昇り始める頃にあの場所で待っています  
？と  
』

また照明が切り替わり、王女様を照らす。

「それにしても、少年は一体何のようだ？ まさか、愛の告白か…  
…。いや、それはないな！ しかし遅いな少年は……。もうそろそろ朝日が昇り始めるぞ。私を待たせるというのか」

一瞬にして照明は消され、何か重たいような物で叩かれたような  
鈍い音が響いた。

照明が付き、少年のみを照らす。

「それにしても、王女様は一体何のようなんだ？ まさか、愛の告白か……。それはないな。あの場所って昨日のところだよな」

少年は扉に手をかざす。鍵は掛かっていなく、ゆっくりと開く。

『少年の目の前には血を流した王女様が倒れていた。』

「えっ……。王女……。様……。？」

！

「王女様！ いったい、一体なにがあったんですか！」

「やっと……。きたか……。心配すら気付かなかったよ。わたしはここ数日間、ずっと狙われていたんだ……」

「なにも話さないで！ いま人を……！」

「いままで1人だったんだ……。だから、最後まで1人なんて……嫌なんだ」

「なに言ってるんですか……。いいから、いま人を呼びますから！」

「……いいんだ。私はもう、きつと、長くない……。だから」

「諦めるなっ！ あなたは僕の友達じゃないですか！ 勝手に死ぬなんて許さない！」

「ごめん。あれ……。なかったことにしてくれないか？」

「……………!!」

「君と私は友達じゃなかったことにしよう。私たちは出会っていなかった。今までの時は無かったんだ。赤の他人と話した程度……。そうだ、その方がきつといい。そうしたら……。君は悲しまないですむ。いまも目の前で見ず知らずの人が命を落とすだけだから……。ほんとうにそれだけ……。それだけなんだよ。だから、お願いだから……。泣かないで。」

君の人生に幸あれ。満面の笑みをいつも。それだけが私の……。最後のお願いだよ」

「ふざけるな！ あなたが言ったんじゃないか！ あなたの言ったことだ、しっかり守れ！ 死ぬなんて許さない。いいか、生きるんだ。生きてまた」

「君は元気だな。そんな君に本当に助けられた。感謝しきれないほどだ。君と初めて会ったのはぶつかった時だったな。私の初めての」

恋は君だった。幸せだったんだ、私は……」

『王女様はまぶたを閉じて急に喋らなくなってしまいました』

「ちよつと、なんで話さなくなるんですか……。ねえ……。起きてくださいよ、目を開けてくださいよ。」

「ここから男の声が！」「今は緊急事態だ！ 突入するぞ！」  
バンッ！

照明が消えて静かになる。

『少年が愛した1人の女性。その人に関わることでもなくても命が待っているのは分かっていた。それでも、その人が抱え持つ大きすぎる十字架を支えることぐらいはできると思った。』

しかし、王女様は何者かに暗殺されてしまい、のちに少年も護衛兵に捕まり、処刑されてしまいました。そして、この国に少年の名は深く刻まれることとなる。そう、王女様を殺した犯人として』

会場に照明がつき、全体が明るくなっていく。  
舞台の上に役者が揃い、一礼をして幕は閉じた。

「君にはきつと、まだ難しいお話だったね」

「ぼくわからない……。でも、かなしいのはわかったよ。すっごく  
かなしかった……」

僕は知らない間に涙を流していた。

僕にとって、このおはなしは悲しい話でしかないときとは思  
っていた。恋をするのは悲しいことだと思った。なぜ彼女がこんな  
話しを書き、僕に見せたのか……。僕はまだ、彼女の本当の意図を  
掴めずにいたのだ。

演劇が終わり彼女に手を引かれ帰る途中、僕は彼女の哀しそうな  
顔を見た。

そんな彼女になんて声を掛ければいいのか分からなかった。感想を  
言うには言葉が足りず、励ますには理由が見つからず、想いを伝え  
るには勇気が足りない。

そんな悩んでいる僕に彼女は優しく声を掛けた。

「辛いお話しを見せてしまったね……」

上から一粒のしずくが落ちてきた。上を見上げると彼女は泣いていた。頬を伝う涙が夕陽に照らされ輝いている。

「おねえちゃん……？」

彼女はそれから一言も言葉を口にしないまま、僕の手をぎゅっと握り締めて歩いた。

空に宵の明星が姿を現した頃、古びた本屋に着いた。

出迎えたママに彼女は今日の出来事を簡単に話し帰っていった。

彼女のその後ろ姿が弱弱しく、儚く見えたのはきつと見間違えではなかった。

その日の夜、彼女が消えてしまう夢を見て眠れなくなってしまい、寒気がして身体が重くなった。そして、風邪を引いてしまった。

## 7 ページ目 『またお会いしましょう』

金曜日。

僕はベッドの上で寝込んでいた。

窓から見える外は霧界むかいに包まれて薄暗く、時間感覚を狂わせる。感覚を狂わせた原因はもう一つあった。風邪だ。

昨日の夜中から寒気が止まらなかった。服を重ね着して毛布に包まり、冷えないようにしていたのに震えが一向に止まない。何度も起きては寝付けず、怖い夢ばかりが頭を駆け巡る。ママに熱を測ってもらったがあまり高くはなかった。微熱程度だ。

それでも寒気は治まらない。その理由はあの彼女の後ろ姿にあると思った。どうしても頭から離れずにいる。いまでも鮮明に浮かび上がる。夕暮れだった。僕には彼女の書いたお話より切ないと思った。その感情が切ないというものなのかは分からないが、切なかった。

僕が彼女を励ますには幼すぎるのだ。言葉が出ない。あんなときにどんな言葉が彼女を救うのか分からない。涙で視界はぼやけ、喉の奥に留まる想いを口にできず、彼女と繋いだ手はいまだに震えている。

言葉を知っていれば彼女を救えたのにと考えてばかりだ。



天井がいつもより高く見える。上から文字が降ってきた。どれも読めないものばかり。幾つもの文字や言葉が落ちてくる。手を伸ばして掴んでみるがするりと零れ落ちていく。きつと彼女なら簡単に掴み取ってすんなり読んでしまうに違いない。

僕は自分の無知さに心が痛んだ。知らないことが恥ずかしくなった。幼い頃の僕にとって知らないことは不幸そのものだった。

彼女を悲しませないための知識がほしい。彼女の涙を見ないように僕が支える。

僕はもう一度天井に向かって手を伸ばした。いくつか零れ落ちていく中、ひとつだけ掴むことができた。そのままぐっと力を込めて握り、胸まで引き寄せる。拳の中から微かに光りが見えた。そっと力を緩め中を覗く。

?希望?

この文字も僕には読めなかった。だが、これだけが掴むことができた。どうして掴めたのか、どうしてこの文字なのか分からない。ただ、それは、僕の中の恐怖や不安や震えを消し去った。そして、どこまでも澄み渡る青空のような無限に広がる晴れやかな気持ちになった。

外を見ると霧界は消えて雲間から光りが射している。あの文字と同じあたたかい光り。

僕は体を起こした。さつきまでの寒気が嘘の様に消えている。ママを呼んで熱を測ってもらおう。微熱も下がっていた。

神様が僕に彼女を救ってあげてと言っているように感じた。

ママが部屋のドアを開けると同時にお店の扉が開く音がした。

「すみませーん。今日もお邪魔していいですか？」

彼女が来た。僕はベッドから飛び起き、彼女の元まで走る。途中本がたくさん詰められたダンボールに躓いたが気にはしなかった。

彼女はいつもの若草色のトレンチコートに身を包んでゴーグルを掛け、手に大きな紙袋をぶら下げている。

「おねえちゃんきてくれたんだね！」

僕にとって、今日彼女が来るのか来ないのかずっと気になっていた。もしもあのまま姿を消してしまったら、僕は心に一生消えない傷を刻むことになったに違いない。

「おっ！ 今日もキミは元気だな。今日はあまり時間はないが、短い本なら読んであげれるよ」

彼女はいつものように笑いかける。一転の曇りもない澄んだ瞳。昨日の彼女が夢や幻のように感じる。昨日の彼女はどこにも感じな

かった。

「よいしょっと……。さて、どの本を読もうか」

彼女は床に座り、後ろにある本棚から適当に一冊の本を手取る。

『またお会いしましょう』

「ちょうどいいお手軽な本だよ。これなら読んであげれる」

彼女はその白く細い指で撫でるようにページをめくる。本も気持ちがいいのか、はらりとめくられる。そして彼女は笑顔になった。

「それじゃあ読むよ。」

花火の上がる夏の終わり。華やかに空を彩る光に照らされる二人がいました。

大きな楠木の下で花火を見上げています。

青年は夏の終わりを告げる秋風に流されてゆく煙をみつめています。  
青年に寄り添っている女性はじっと彼の顔を見つめているわ。

女性は突然こんなことを口にしたの。

「わたし、この町を出るの」

彼はなにも口にしないまま彼女の顔を見つめた。

「わたしね、この町が大好き。みんな優しくて、あたたかくて、きれいで。でもね決めたの。わたしはもっとたくさんのことを知りたいの!」

彼は口を開かない。

「だからね、今日で会うのは最後。ううん、実際は最後じゃないけれどお別れ。そうね、5年後にまたこの楠木の下で会いましょう」

彼女の曖昧な口約束に頷く。

彼は彼女の頭を優しく撫で、何も言わず空を見上げた。

そして最後の花火が打ちあがるのを見て彼はこう言ったの。

さて、なんて言ったでしょう?」

僕の頭の中には初めからひとつのセリフが浮かんでいた。まるでこの本を一度読んでいて、答えがわかっているような感覚。僕は即答した。

「またあいましょう!」

「すごい! 正解だよ! この本読んだことあったの?」

「ううん。なんとなく!」

彼女は開心していた。「キミも成長しているね」と笑い、嬉しそうだ。

彼女のその笑顔が僕にとっての幸せだった。

「そう、彼は言いました。

「また会いましょう」

「ええ、またお会いしましょう」

彼女は秋風に誘われるように彼のもとから去っていきました。

どうだったかな？　すごく短くていいお話でしょ！

「うん！　でも、すこし気になったところがあるよ！

「なにかな？」

「どうして去っていったの？」

彼女は僕の髪をくしゃくしゃにして笑った。

「キミは本当にすごいね！　面白いところに気が付くんだね。そう、このお話を書いた作家さんはちょっと変わっているの。キミが言いたいのは、「どうして一緒に帰らなかったの？」ってことだよね」

「うん！」

「この作家さんの特徴でね、掴まえさせてくれないの。青年と女性が出てくるけれど容姿が書かれていないし、花火は上がっているけれど詳しく書かれていない。この人の作品はその時の気分によって見え方が違うの。」

2人の心の中を書けるのに書いていないよね。それはその時の気分を読者に想像させるの。実は彼が、何か話したいのに言葉が見つからないから話していないとか、彼女がどうしてなにも言ってくれないのかと思ったりとか。この本は読み返すたびに違った味わいがあるの。」

そして、キミが気になっている問題。「どうして一緒に帰らないのか」というと、一緒に帰ってしまったら2人は結ばれるかもしれないと、ほとんどの人が思うわ。だから彼女を遠ざけたの。そうすることによって読者に想像を膨らませてもらう。キミは5年後の彼らをどう想像する？」

情報の少ない短い話を想像で補うには幼すぎる。僕は正しい答えを出せなかった。

「ふたりはけっこんした！」

また彼女は笑う。

「その発想は私にはなかったよ！ 結婚するのも面白いね。適当に最後を決めるのも可笑しくて楽しい。ほかには何か思い浮かんだ？」

何も思い浮かんではいなかったが、彼女の笑う顔が見たくて適当

に答えた。

「うーん、かえってこなかったとか」

「そうそう。そんな風にしてこの本を読むんだよ。きっとキミなら作者の思い浮かべた本当の答えを見つけられるかもしれないね」

彼女は本当に嬉しそうだ。いろいろ思い浮かべて僕に「どうかな？」と聞いてくる。

僕はその質問になるべく近い答えを探した。その度に彼女が幸せそうにするから、僕は彼女の顔から瞳を放すことができなかった。

「あ、もうこんな時間！ ちょっと長居し過ぎた！ じゃ、またくるね。お邪魔しましたー」

彼女はすぐに立ち上がって出て行った。その彼女の後姿は幸せそうだった。

僕は今日の本がとても好きになった。世の中にはたくさん本がある。自分で結末を考える本があるのを初めて知った。僕の無知さは不幸であると同時に、新たな発見を生み出す幸せでもあったのだ。

7 ページ目 『またお会いしましょう』（後書き）

読んでいただきありがとうございます！ 感想をいただけると幸いです



8ページ目 『黒風の声』(前書き)

今回はちょっと不調です…

## 8ページ目 『星屑の声』

土曜日。

朝日が昇りはじめた時刻。時計の針は2本とも真下を指している。小鳥のさえずりが聞こえる晴れた空。

そんな朝早くからお店のシャッターを軽く叩く音が聞こえた。ママもおじいちゃんも起きてはいないようだ。もともとここは、そんなに早くから開店はしないから当たり前前だと思った。

僕はベッドから降りて扉へ向かう。シャッターを開けようとしたがびくともしなかった。そこで僕は裏口に回り、ママ達を起こさないように音を立てずに外へ出た。

そこにはシャッターを叩いている、若草色のトレンチコートに身を包み、ゴーグルを掛けた彼女がいた。

彼女は僕に気づいてにこつと微笑んだ。

「どうしたの、おねえちゃん？」

「キミなら起きてくれると思っていたよ。でもごめんね。こんなに朝早くに来ちゃって……。お母様とおじ様起こしちゃったかな？」

「だいじょうぶだよ。ママもおじいちゃんもねてる。それで、どうしたの？」

「あ、そうだった。今日はね、ちょっと忙しくて来れないの。それでね、本を読んであげれないんだ。だから今日はキミが好きそうな絵本を持ってきたの。きつとキミは好きだと思う。キミにも読めるように横に読み方を書いておいたから」

彼女はそういうとカバンから一冊の本を取り出した。鮮やかな色使いをした、本物の星空のような本。僕はその表紙に心を吸い込まれそうになった。彼女の言うように僕は、きつとこの絵本が好きなのだろう。そう思った。

「すごくきれいなえほんだね！」

「そうですね。キミみたいにきれいな世界を持つてる人はきつと好きになると思ったの。今日は一人で読んでね」

「うん、わかった！ あしたはほんをよんでくれるよね？」

「もちろんだよ。それじゃあ明日来たら読んだ感想を聞くからね。約束よ」

彼女は右手の小指を立てて僕の顔の前に出す。その小指に自分の小指を掛けて約束をした。

彼女はそつと小指を離し、僕の頭を優しく撫でた。バイバイと手を振って走っていった。

町はまだ寝静まっている。まるでこの町に僕と彼女しかいないかのような空間。それも悪くないと思った。

彼女が帰ってから僕は、静かなお店の中で1人絵本を広げた。

表紙をめくるとそこには壮大な星空が一面に広がっていた。四季

の星々がそのページに集まっている。オリオン座やおとめ座、はくちよう座にやぎ座におうし座。他にも幾千の星や星座が載っている。次のページを開くとタイトル名が書かれていた。表紙にも書いてはあったが、漢字で書かれていたので読むことができなかった。だが、そこに書かれているタイトルには振り仮名が書かれていたので読むことができた。

『キミ星屑こえの声』

黒い背景に白い文字で書かれている。その白い文字は天の川を想像して書かれているようだった。左のページに文が書かれている。

「満天キミの空に星屑こえの声が響いた。  
幻想や夢幻ゆめまぼろしで終わらないよう、少年は笑った」

少年が小さな丘の上で星空を見上げながら笑っている。星たちがきらきらと瞬き、まるでその場に僕もいるような感覚がした。次のページをめくる。

「夜と闇が共に去り、祝福と共に朝がやってくる。  
その短い間に、本当に伝えたい想いや願いは、うまく伝わらないように世界はできていた。  
それでも……少年は笑ってみせた」

少年は膝を立てて座りながら夜風に吹かれて髪がなびいている。彼の瞳には薄っすらと涙が輝いていた。

僕は彼の泣いている理由を簡単に考えた。

……なにかつたえたいことがあったのかな？

ページをめくる。

「キミの想いも願いもこの空に吐いてみて。キミの中で止まっていた時間が動き出すから」

右のページに少年が描かれ、上を向いて呟いている。頬を伝う一筋の雫が光っていた。そして、左のページに違う場所から空を見上げる少女が描かれている。その少女の瞳にも涙が浮かんでいた。まるで2人の想いが通じ合っているかのように。すぐ隣で聴いているかのように。

「そうしたらずっとキミの手と僕の手を繋いでいられるよ。……離したくなんかないんだよ」

次をめくると、少年は顔を伏せてぼろぼろと涙を流していた。満天の空は悲しげな表情をしている。彼を慰めるかのように星屑の聲が響いていた。

「」

そこには台詞が書かれていない。僕はそこにどんな言葉を入れればいいのか分からなかった。僕の中で慰めの言葉は「大丈夫」しか浮かばない。その言葉が適切だとは思わなかった。この少年に掛け

る言葉はもつと他にあるはずだと考える。それでも、その時の僕には思いつかなかった。

そしてページをめくる。

真つ白な両ページをまたぎ、大きく横に少年の台詞せじふが書かれていた。

「「そつか……。よかった」」

次のページで少年は涙を拭って笑っていた。

空を星が次々と流れていく。そして、少しづつ夜は明けて空から姿を消した。

僕はこの絵本を理解することが出来ずにいた。自分一人で読んだせいだからだろうか。少年の気持ちが変わらなかった。出てきた少女と星屑ほしくずの声は一緒のものだったのか。それさえも僕はわからなかった。

彼女ならきつと簡単に理解してしまうのだろう。そして、あの何も書かれていなかった台詞せじふの答えも分かっているに違いない。ふと彼女との約束を思い出した。僕は彼女になんて感想を言えばいいのか困った。理解できなかったとは言えない。せめてまともな感想を言ってあげたい。僕はその後、何度もこの絵本を読み返した。彼女への感想を考えるために。

その日、彼女はやっぱり来なかった。だが、それでよかった。僕はまだ感想を言えるような状態ではなかった。僕は何度も繰り返し

て読んでいるうちに、疲れて寝てしまった。気が付けば朝日が顔を  
出していた。

8ページ目 『星屑の声』(後書き)

読んでいただきありがとうございます。次を期待してください！



9 ページ目 『取り戻す物語り』 (前書き)

前半戦はこれで終了です。

今度の更新は第2章になります。

## 9 ページ目 『取り戻す物語り』

日曜日。

春風の香りというか、花の香りというか、そんなあたたかい香りがふわっとする朝。

僕は目をこすりながら部屋を出た。床に積み重ねられた本や段ボールにぶつからないように体を横にしなが歩く。キッチンにいくとママがホットケーキを焼いていた。僕の嗅いだにおいはこれだったのかもしれない。

「あ、起きたんだね。おはよう」

しかし、キッチンの方から聞こえたのはママとは違う、聴き慣れた声だった。

見慣れない服にエプロンを着た女性がホットケーキをひっくり返しながらこつちを向いて微笑んでいる。

その女性はいつも若草色のトレンチコートを着て、ゴーグルを掛けている姿が印象的な彼女だった。

僕はなぜ彼女がこんなに朝早くからいるのか不思議で仕方がなかった。

「おはよう。ど、どうしたの、おねえちゃん。こんなにあさはやくから……」

「ふふつ。昨日は申し訳ないことをしたからね。今日はお詫びのしるしにホットケーキでもご馳走しようかと思ったの。ホットケーキは嫌いじゃないよね？」

僕は少しの間口が開いたままだった。それは彼女の意外性を見れただけでなく、僕の好物を作っていたからだ。

「きらいじゃないよ！ だいすきなんだ！」

彼女は嬉しそうに微笑み、皿に盛りつけていく。バターがホットケーキの上で熱によって溶けていく。シロップは小さな透明の小瓶に入れられ、テーブルの上に置かれた。そして、銀のナイフとフォークが丁寧に置かれる。

「さあ、冷めないうちに食べて」

彼女は僕の真向かいに座り、両肘をテーブルに立てて頬杖をつきながら言った。

「うん！ いただきます！」

僕は置かれている銀のナイフとフォークを握り、上下に動かして切る。小さく切ってからシロップを掛けて口に運ぶ。中でバターの香りとほのかに甘いシロップが混ざり合う。今まではママの作るホットケーキが一番だと思っていた。けれど、彼女のを食べた瞬間にそれは打ち砕かれた。

……おいしい。同じホットケーキなのにママとこんなに違うんだ。

僕は次々と小さく切っては口に運ぶ。その度に僕の顔は緩んでき、気がつけば満面の笑みをこぼしていた。

そんな僕を見ながら、彼女は最高の幸せを感じるかのような笑みを浮かべていた。

「おいしいよ！ すっごくおいしい！」

当時の僕にはそれしか言えなかった。ただ、それが素直な気持ちだった。

「よかったよ。上手に焼けているのか心配だったの」

「ママのよりもおいしいよ！ ……あれ？ ママはどこいったのかな？」

僕は彼女の後ろにママがいないのを知りながら覗いたり、首が動く範囲を見回した。もちろん、視界に入る場所にいなかった。すると彼女が姿勢を伸ばして僕の目をじっと見て口を開いた。

「朝早くにキミのお母様から連絡が来てね、「町の外に買い物があるって、でもキミを連れていけない距離だから一緒にお留守番を頼めないかしら」って。だからね、今日はお母様が帰ってくるまでキミと一緒にいるから。よろしくね」

彼女はウインクをして握手を求めてきた。僕はナイフを置いて手を伸ばして握手をする。

今日は一日、彼女と一緒にだと思つたと自然と笑みが出た。

「それを食べたらどうしようか。何かしてほしいことある？ なんでもいいよ。公園で遊ぶのもよし、本を読むのもよし、昼寝でもいいよ」

ホットケーキを口に入れながら考える。まだ朝だ。今から本を読んだらいつたい何冊読むことができるだろうか。でもそれじゃあ彼女を疲れさせてしまうし、僕も疲れる。かといって公園で遊ぶのも

気分じゃない。

「さんぼしにいこうよ！ かえってきたらおやつにして、ほんをよんでほしいな」

彼女は「うん」と首を縦に振ってキッチンに向かう。

「それじゃあ、お昼は公園のベンチに座って食べようか。なにが食べたい？」

今はお腹いっぱいでも入らない。そして、何も思いつかなかつた。とくに食べたいものがあるわけじゃないから彼女に任せることにした。

彼女は何を作るか考えている。思いついたのか何かを作り始めた。僕はその間に残っている冷めかけのホットケーキを食べた。

食べ終わってから皿を片づけ、部屋に戻って服を着替えて戻ってくると、ちょうど彼女はお弁当を作り終わっていた。彼女は僕から皿を受け取って洗う。僕は乾いた布巾を持ち、濡れた皿を拭いてそれを食器棚にしまった。

「それじゃあ行こうか」

彼女に手を引かれてお店を出た。

桜の花がゆつくりと宙を舞う。まだ咲いている木の方が多いが、葉桜になりかけている木もあった。川の上に架かるコンクリートの橋を渡り、いつもは行かない場所へ歩いていく。

同じ町の中。

それなのに周りの風景は一気に変わった。地形が少し窪<sup>くぼ</sup>んでいて、僕の目線からは一面に草原が広がっているように見える。この町にこんな場所もあるんだ。そこは風の通りがよく、春風が優しく吹いていた。

窪地を出て先に進んで歩く。その先に小さな公園が見えた。

「あの公園で少し遊ぼうか」

その公園に入り、辺りにあるのはベンチとブランコだけだった。木の素材を生かした二人掛けのようなベンチに、鉄製の緑色に着色されたブランコ。彼女に連れられてブランコに乗る。ゆっくりと僕の背中を押して徐々に加速していく。ある程度のスピードになると僕は怖くなって「止めて！」と半泣きになりながら言って止めてもらった。彼女は焦って僕に「大丈夫？」と背中を擦りながら謝る。

ブランコに座ったまま、落ち着くのを待つてベンチに座った。彼女はカバンから作ってきたお弁当を取り出す。中にはサンドウィッチが入っていた。ハムのピンクにレタスの緑、卵の黄色が鮮やかだ。

彼女は濡れたタオルで僕の両手を丁寧に拭いた。

「ウイルスがついてると大変だからね」

そして僕はその中のひとつを手取る。それを大きく開いた口に入れる。さすがに一度では入りきらなかった。膨らんだ頬を動かして飲み込む。

「そんなに慌ててお口に運んだら喉に詰まらせるよ?」

「おねえちゃん! すっごくおいしいよ!」

彼女は微笑みながら僕の口の周りを優しく拭いてくれた。

「たくさん食べるんだよ。まだまだあるんだから」

僕は頷いてもくもくと食べた。4つ食べ始めたところでお腹はいっぱいになった。彼女から紅茶をもらって4つ目を流し込んだ。

食べ終わるとまぶたが落ちてきた。うつらうつらと前後に頭が揺れ、そして彼女の肩にもたれた。

目を覚ますと知っている天井が見えた。

僕の部屋だ。

彼女は眠った僕を家まで運んでくれたようだ。

「あつ、起きたんだね。でも、今日はもう遅いからそのまま寝た方がいいよ。そつだ、本読んであげるよ」

そついいながら彼女は僕の頭を優しく撫でる。

「今日のお話は 『取り戻す物語り』。

「僕は旅に出る」そう言って少年は冥土行きの舟に乗ったまま帰っ

て来なかった。

しかし、少年はある少女に約束をしていた。

きっと戻ってくる。いつになるかわからないけれど。カロンに着いたら戻ってくるから。そして一緒に旅をしよう。

ずっと待ってる。一緒に行きたいから。

2人はまた再び出会えるのを信じて……。

少年の周りに広がる宙<sup>そら</sup>を走る光。有限の光は刹那に消えていく。視界が暗闇に覆われていく。……ここは何処なの？

土星はとうに過ぎた。少女と別れてからいくつの年が過ぎただろう。少年にはもうわからない。

少女はそのころ地上から少年の足跡を探していた。軌道なんてありはしない。空を見上げてても少年は何も応えてくれない。だから少女は夕風へ溶けていく誓いを今はただ1人で佇んで待っている。

少年の声は息は音は消えていく……。

少年の夢は愛は約束は崩れてゆく……。

「ああ……記憶はもう遙か底に沈んでしまったのか……」

少年は空虚に向かって手を伸ばす。

少年は掠れてゆく意識の中で思う。

「そっだ、世界<sup>キミ</sup>にひとつだけ残すとしたら何がいいかな？」



「さて、少年は何を残したと思う？」

僕は彼女の話最後まで聞かないうちに寝てしまっていた。

「キミにまた会えることを信じて、私はこの本を残すよ……。キミがこの本を完成させるんだ。たくさんの人と触れ合って成長して、このお話の続きを書いて。それが、私の望みだよ」

翌朝。

僕は長い眠りから覚めたように体が重たかった。部屋には彼女の姿はなく、枕元に昨日読んでくれた本、『取り戻す物語り』が置かれていた。

ベッドから降りて重たい体を引きずるようにして歩く。お店に出るとママがいて、おじいちゃんもいた。

「ママ、おねえちゃんどこにいったか知らない？」

「昨日ママが帰ってきたときに帰っていったわよ」

彼女はママの帰宅と同時に帰ったらしい。

でも、僕はなにかが引っかかっていた。口の中で砂を噛んだような嫌な感じ。

僕は部屋に戻り、彼女の置いていった本を手にとって開いた。

そこには一通の手紙が挿はさまれていた。

「これをキミが読んだころには私はこの町にはいないだろう。でも心配しなくていいよ。」

いつになるかわからないけれど、きつと帰ってくる。

その時にこの本の質問の答えと、前回の質問の答えを聞くことにするよ。

キミに本を読んであげられないのは寂しんだけど、私は旅に出る。

キミなら、きつとすごい人になれる。

キミの素直な気持ちが、この世界を変えるんだ。

何を言っているかキミにはわからないだろうね。

でも、それでいいんだ。

勝手に町を出ていく私を許してほしい。

それではまたね

「

彼女は僕の目の前から、町から、消えた。

そう、僕の物語はここから始まったんだ。



9 ページ目 『取り戻す物語り』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。  
感想やコメントをいただけると幸いです。

(前書き)

第二章のスタートです！

あれから7年と数カ月の年月が流れた。  
結局、あの日以来彼女を見ることはなかった。  
どこにいるのか、どこに行ったのか、生きているのかもわからない。

ただただ、時間だけが無情に流れていった。それは僕の気持ちを不安にさせ、焦りを生み出させた。

僕は成長した。

あの頃の僕は言葉もまともに話せず、彼女の問いに困惑して笑うことしかできなかった。しかし今は、彼女のように山のような本を読んで知識を増やした。どんな質問にも答えられる豊富な知識。

そんな僕も彼女のように旅に出る支度をしている。そう、僕は彼女が最後に読んでくれた『取り戻す物語』の続きを書くために。

僕が、僕自身が、この世界に残すものを探す旅

まだ春の名残風が吹き抜ける町。

僕は茶色のポストンバックに最低限の食料と着替え、彼女の残した本を詰め込んでいた。

「ほかに持っていくものはないか……」

僕自身が旅に出るなんて、考えたこともなかった。ずっとこの町で暮らしていくと思ってた。ずっと彼女が横で本を読んでくれるものだと思っていた。

「いつになればこの部屋に戻ってこられるかな……」

膨らんだバツクを手に持ち、段ボールが積み重ねられている細い廊下を抜ける。キッチンで母さんが料理をしている。

「それじゃあ母さん。ぼく行ってくるよ」

母さんはフライパンに入っている炒められた野菜を容器に詰め、僕に渡した。

「ありがとう母さん。いつになるかはわからない……。けど、必ず帰ってくる。だから待ってて」

「最後に聞かせて。行く理由はあるの？」

僕はその言葉を聞いた瞬間、走馬灯のように今までの記憶が流れた。

「理由はありすぎる。語れないくらいあるよ。母さんは覚えてるかな？ 僕に好きな人ができたって言った時のこと」

母さんは黙って小さく頷く。

「母さんも気づいてたと思う。彼女のことなんだ」

母さんはまた黙って小さく頷いた。

「だから僕は彼女を追わなくちゃいけない。好きだから。この気持ちを伝えなきゃいけないから。そして、彼女が残した本の続きを書く。これは僕にしかできないんだ。きっと彼女がいなかったら、いまの僕はいなかったと思うんだ」

母さんはまたも黙って頷くだけ。

「だから、理由はいくらでもあるんだ……。この町から出るのは寂しいけれど、それでも僕は行かなくちゃいけないんだ。ごめんね、母さん」

母さんはやっと重たい口を開けた。

「いいのよ。怪我をしないで無事に戻ってくればいいの。ちゃんとみつけてくるのよ?」

「うん! 行ってきます!」

僕は重たいポストンバックを肩に担いぎ、走って外に出た。





10ページ目 『銀の月の掬い方』(前書き)

最近不調でした。イメージを膨らませて読んでいただきたいと思います。

## 100ページ目 『銀の月の掬い方』

「さて、はじめはどこへ向かおうか」

十字路の交差点。

僕の目の前には山の方へ向かう道がある。途中で道が整理されていないのが目で見てわかる。

砂利道や土の上を歩いていくのはなかなか大変そうだな。

右を向くと演劇会場がある道になっている。

あっちは小さいころ彼女と一緒に行ったし、他にも何度か行っているから行かなくていいかな。

さらに右に身体を向ける。海の方へ続く道。

道もしっかりしてるし、港もあるし、もしかしたら彼女もこの道を辿ったのかな？

最後の方向を向く。石橋が架かり、煉瓦で《れんが》できた建物がずっと続く住宅街。

こっちは一度も行ったことないな。この住宅街の先に道はあるのかな？もしかすると行き止まりだったりして……。

悩んだ末、僕は住宅街の方へ行くことにした。海の方へ行こうと

もしたが、まだこの町で一度も行ったことのない場所へ行ってみたかった。

石橋を渡る途中、橋の真ん中で立ち止まってみる。そして振り返る。

行き止まりじゃなく、道があつたのなら、もう当分は帰ってこられない……。彼女もそんな気持ちだったのかな。

僕は前を向いて歩く。

両側に高い煉瓦作りの建物が並んでいる。まるで違う町に来たみたいだ。上を見ると切り取られたような青空が広がっていた。建物と建物の間がない。一枚の壁で出来ているようだった。そして何より、交差点のような道がない。ただずっと一本道。上り道や下り道、曲がり角はあつても、横へ逸れることのできる道がない。

僕はもくもくと前へ進む。そういえば、この道を歩いていてまだ誰とも会ってないな。これだけ建物があるのに……。

とうとう誰とも会わないうちに開けた場所へたどり着いた。行き止まりではなかった。つまり、もう引き返せなくなつたわけだ。

煉瓦で出来た小さな家が数えられる程ある。そこには人もいる。僕はここに住んでいるであろう住民に話しかけた。

「あの、ここに住んでいるのですか？」

その人は皺しわを刻んだお婆さんだった。そのまま静かに頷いた。お婆さんは僕の歩いてきた道を指す。「ここから来たのかい？」と訴えるように。僕は「うん」と頷いた。

「ひとついいですか？」

「またも頷く。」

「あの建物には誰も住んでいないんですか？」

「住んでおらんよ。あれは防壁さ」

「防壁？」

「昔は物騒な世の中だったのさ。とくにこの周りでは感染病が流行してね。そのせいで人に近づいてはいけないという町長の命めいが出たのさ。感染を広げないためにもね。あんたがここへ来るとき、上がつたり下がったりしたたろう？」

「僕は頷いた。」

「あれは感染を防ぐために作られたのさ。男共はみんな建設に借り出されたよ。おかげさまでみんな感染して死めいんじまった……。彼らがいなければこちら一帯は誰もいないだろうね」

「これで謎は解けた。横道がない理由わけ。高くそびえる建物。長い一本道。  
あれは住宅じゃなくて壁だったんだ。」

「お婆さん、ここを通る人は珍しいですか？」

「頷く。」

「僕はダメもとで聞いてみることにした。」

「だいぶ前、7年も前になるんですけど、ここに僕くらいの年齢をした女性が来ませんでしたか？」

お婆さんは首を傾げる。「何か特徴でもないのかい？」と言った。

「たぶん荷物を抱えてたと思います。あと、若草色のトレンチコートとゴーグルを身に着けていたと思うんですが……」

「ああーそれならよく覚えているよ！」

思い出したのか、急に大声を出した。

「そういえば、特徴的な色をしたコートを羽織った女の子が来たねー。『荷物を抱えた私ぐらいの年齢をした少年がもしも来たら、この本を渡してほしい』って言って、本を置いてすぐに行っちゃったさ」

「あの、その？本？っていまありますか！」

「ええあるとも。おばあの家に来なさい。歩き疲れてもいるだろう。本を渡すついでに紅茶でも飲んでいきなさい」

お婆さんの後ろを辿りながら家へ向かう。途中周りを見渡したが、あまり多くは住んでいないみたいだ。それに、多くがお年寄りばかり。それもお婆さんばかりだ。男性陣は皆死んでしまったからか。

苦労してるに違いないな。旅から帰ってきたら何かしてあげたいな。母さんや町の人たちはここのことを知ってたのかな？

気が付くとお婆さんのお家に着いていた。

煉瓦を積んで泥を薄く塗り固めて壁が造られている。入り口には

扉はなく、吹き抜け状態だった。屋根には木で造られた骨組みに、紐とたくさんの藁で編みこんだものを敷き詰めているようだ。中は程よく風が通り、日の光が藁の隙間から差し込んで暖かい。

「まあ、ここにでも座って待っていないさい。いま紅茶を入れるから」

家の中は至ってシンプルだった。窯にテーブルに椅子、食器棚に少量の食器。ちよつとした壁飾りがいくつかあるだけだ。

「紅茶ができるまで時間があるから先に本を渡すよ」

そう言うと、食器棚の奥、ちよつと食器で隠れているところから本を取り出した。

「これさね」

『銀の月の掬い方』。

「これって……」

そうだ。たしか、僕がまだ小さいころ読んでくれた本だ。でも、どうしてこの本を残していったのかな？

本を開いてぱらぱらとめくる。そのとき一枚の紙が挿んであることに気が付いた。それを取り、読んでみる。

「キミが来ることはわかってたよ。この道を選ぶことも、この家によることも、キミは私と同じ道を歩もうとしている。それじゃあダメなんだ。キミはキミの道を歩まないといけない。もしもこの先、私と同じ道を辿ったとすれば、2度と会えないかもしれない。キミ自身の感で歩くんだけ。私を追うと考えないで。また会える日を信じ」

て」

彼女は僕の考えを予想していたんだ。すごいな……。そっか。いまの僕は彼女の真似をしているだけなんだ。これじゃ会っても話すことなんて何も無いな。

「入ったさ。これを飲みながら読んでもいいさ。ちょっと外に出てくるよ」

紅茶を置いて外へ出て行ってしまった。

温かい紅茶をカップに注ぐ。爽やかな香りがふわっと鼻を抜けた。ゆっくりと口に運ぶ。

「おいしい」

素直に言葉が出た。僕の目の前にお婆さんがいたらもう一度大きな声でおいしいと言ったに違いない。僕は何度か口にした後、本を読んだ。

『銀の月の掬い方』

これは捕虜の少女と若い兵士の物語だ。

捕まっていた人の中に、まだ幼くして美しい容姿を持った少女がいた。

兵士は自分がなぜ人に銃を向け、捕えなければならぬのか悩んでいた。そしてあるとき、無断で捕虜になった者たちを逃がそうと考えた。

あの少女はまるで、水面に浮かぶ銀の月のようだ。こんな薄暗く、



汚い所にいちやいけない。

兵士は見張りの時に捕虜の者たちに自分の考えた救出計画をひっそりと語った。

「あらゆる手段を使ってでもあなたたちを掬ってみせる。たとえ私が死んでもだ」

何度も計画実行のチャンスを伺う。少女は兵士に話しかけた。「絶望に満ちていたの。あなたの言葉が、行動が、希望です」

時間が過ぎていく。衰弱していくのが手に取るようにわかる。もう時間がない。早くしないと！

1人で見張りをしているとき、少女はか細い声で話しかけてきた。「希望は……まだ、ありますか……？」

「まってて。いま逃がしてあげるから」

しかし 掬うことができずにいた。

「……どうして。どうすればいいんだ。掬うためには一体、どうすればいいんだ。」

星を詰めたビンが必要？

小鳥の霊を入れた籠が必要？

天の羽衣が必要？

世界のすべてが必要？

何を考えても掬えないのか……」

水面が波打っただけで崩れていく。

それから数日が過ぎた。そのときようやく気が付いた。

ああ……そうか。なんにも必要なかったんだ……。

皺しわの刻まれた泥だらけの両手でつくった柄杓を水の中に沈めた。銀の月も水面も濁って消えてしまった。手を水中から上げると、濁った水を掬ってしまっていた」

そう、兵士は希望という風を吹いて水面を揺らし、絶望の結果を生んだのだ。

銀の月の掬い方。それは、関わらないことだった。

「彼女もこの本は読みたくなかったようだったな……。あの時は理解できなかったけど、このお話は悲しすぎる……」

兵士の気持ちも、少女の気持ちも、他の人たちの気持ちも、考えただけで涙が出てくる。

彼女がこの本を置いて行った理由がわかった。

彼女を追いかけるだけじゃこの先絶望しかないんだ。

「あれ、なして泣いてる？」

僕は紅茶がおいしくてと本当のことを言った。だが泣いていた理由とは違う。

僕はこの本をかばんに詰め、一礼して旅に戻った。



10ページ目 『銀の月の掬い方』(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8229o/>

---

アルバム(短編集)

2011年10月10日01時05分発行